

フェドシューク
『古典作家の難解なところ
あるいは
19世紀ロシアの生活百科』(その11)

Ф. А. Федосюк
«Что непонятно у классиков
или
Энциклопедия русского быта XIX века»

鈴木 淳 一
大西 健 司

これは「文化と言語」56号(2002年3月)、57号(2002年10月)、62号(2005年3月)、63号(2005年10月)、64号(2006年3月)、65号(2006年10月)、66号(2007年3月)、67号(2007年11月)、68号(2008年3月)、69号(2008年11月)に発表したフェドシューク著『古典作家の難解なところ、あるいは19世紀ロシアの生活百科』翻訳の続きである。9章、1章、2章、3章、4章、5章、6章、7章、8章、10章に続いて、今回は11章を訳出することとした。今回の翻訳作業も、大学院生が主体となり、鈴木がそれに朱を入れるというスタイルでおこなった。11章は8節からなるが、大西が1～2節、鈴木が残りを分担し、最後に鈴木が全体的な文体の統一を図った。

注についても前回同様である。訳注は[]という形でできる限り本文中に組み入れるようにしたが、より詳細な説明が必要と判断した場合は脚注をつけた。訳語だけで分かり難い場合はロシア語を並列するようにしたのも前回同様である。

第11章 服装 КАК ОДЕВАЛИСЬ

1 節 衣裳と時代 Костюм и время

衣裳はいつの時代でも、文学の登場人物たちを性格づけるためのもっとも重要な手段の一つである。衣裳はたんに登場人物の生きている時代や彼らの社会的地位だけではなく、彼らの性格や好み、習慣をも規定するのである。ロシア文官の制服である「燕尾服 фрак」を着ていないゴーゴリ作品の登場人物など想像できないし、お馴染みの「ハラート халат」¹を纏っていないオブローモフ、いつもの「サロープ салоп」²を羽織っていないオストロフスキー作品の商人階級の女性、「アルミャーク армяк」³に「ジプун зипун」⁴を身につけていないトゥルゲーネフ作品の農民というのも、とても想像できはしない。だが悲しいかな、衣服や履物、被り物の多くは過去の遺物となり、それらの名称ももはや我々の想像力に何も訴えかけてはこなくなっている。劇や映画、テレビではこうした衣裳を目にするものの（もっともそれらの名称など知りようもないのだが）、書物ともなると、もしもイラストがついていなければ、主人公の外見の重要な付属物については、ただ推測してみる他ないのである。しかも、当時の読者に比べて現代の読者にとっては多くのものが失われてしまっている…

18世紀の貴族は、その衣裳と髪型のおかげで、どのように描かれていてもすぐにそれと見分けがつく。おさげのように編み込まれ、白粉が振りかけられ

¹ 「ハラート」はゆったりとした丈の長いガウンのような上着。

² 「サロープ」はゆったりとした婦人用の丈の長い上着。

³ 「アルミャーク」は厚手の羅紗製の裾長の農民上着。

⁴ 「ジプун」は粗織り羅紗製の襟なし裾長の農民上着。

た髪を被り、刺繍を施した「カフタン」にふくらはぎ丈のパンタロン、長靴下に太くて高い踵がついたアンクル・ブーツといった出で立ちだからである。貴族夫人もまた髪を被り、踝に届くほどの裾丈の長い派手なドレスを纏ったが、そのドレスの内側にはしばしば〈フィージミィ *фижмы*=パニエ *panier*=フープ *hoop*〉、つまり鯨髭で作った枠組みが装着されていた。こうした衣裳を別な世紀へ、18世紀をすぐに引き継いだ世紀へさえも、持ち越そうとする者など誰もいなかった。

ちなみに、18世紀の男性衣裳の中でもっとも重要にして顕著な、肩で着る衣服は〈カフタン *кафтан*〉と呼ばれたが、これは現代文学でも多く出会うことのできる「カムゾール」とはまったくの別物である。〈カムゾール *камзол*〉は「カフタン」の下に着用する、原則として袖なしの、現在の「チョッキ *жилет*」のようなものであったが、ただ丈がチョッキよりも長かった。「カフタン」、あるいは「燕尾服」を羽織らず、「カムゾール」だけの姿で外出することはなかった。

ここで思い出してもらいたいのは、プウシキンの『大尉の娘 *Капитанская дочка*』においてグリニョーフとシワープリンが決闘前に、「軍服を脱ぎ捨て、カムゾール一枚の格好になった *сняли мундиры, остались в одних камзолах*」ことである [4章「決闘」]。剣で戦うのにはカムゾール姿の方が遥かに楽だったのである。

ピョートルⅠ世とともに西欧から上着が輸入されると、ロシアでは熟考する間もなくそれを、フランス語の「ローブ *robe*」でも、ドイツ語の「ロック *Rock*」でもなく、使い慣れたロシア語の〈カフタン *кафтан*〉と名づけたのであった。もっとも西欧の「カフタン」はウエストが絞ってあり、刺繍の施された派手な拵えで、ビロード、あるいは目のつんだ絹で仕立てられており、ロシア式「カフタン」とはまったくの異物であった。ロシア式「カフタン」はだぶだぶで裾丈が長く、20世紀に至るまで農民や商人、それに御者などの身につけているのを目にすることができた… 衣服の種類としての「カフタン」は、用途は同じにしても、西欧のそれとロシアのそれでは、外見、裁断法、生

地のどれをとってもしっかりと違った種類の衣服であった。

概して言えば、ロシアの衣裳は二方向に発展していった。一つは父祖伝来の民族衣裳であり、その変化は実に緩慢であった。そしてもう一つは社会の有産階級の衣裳であるが、そこで支配的だったのは、プーシキンの言葉を借りるなら、「邪悪なモードという、我が国の暴君にして、／つい最近のロシア人の疾病 Лихая мода, наш тиран, / Недуг новейших россиян」[『オネーギン Евгений Онегин』5章42連13-14行]であった。都会のモードはたんに諸々のファッションを変化させるだけではなく、始めのうちは耳慣れない呼び名の新たな衣料品を日常生活の中へ持ち込みもした。そうした衣料品は、そのほとんどが西方からもたらされたもので、東方からのものはごく僅かであった。西欧の衣裳は民衆の衣裳に影響を及ぼし、次第に伝統的民族衣裳を駆逐するようになり、現代に至ってその駆逐は、都会ばかりか村々においてさえも、ほとんど完全の域にまで達しているのである。

2 節

男性衣裳

Мужские костюмы

1800年代は、まるでカレンダーが新世紀の始まりを告げるのを待っていたかのように、瞬く間に都会のモードを一新してしまう。鬘やドイツ風カフタン、バックル付のズボンをも身につけて続いていたのは、『戦争と平和 Война и мир』のニコライ・ボルコンスキー公爵か、はたまた『智慧の悲しみ Горе от ума』のトゥゴウホフスキー公爵のような老人ばかりであった。確かに「エカテリーナ風衣裳 екатерининские костюмы」は、宮廷人の祝典用正装としてまだしばらく生き永らえることになるが、それでもそれはもはや約束事上の劇場用小道具とみなされたのであった。

貴族の圧倒的多数は鬘を外し、「燕尾服 фрак」に「チョッキ жилет」、裾丈の長い「панталоны панталоны」という服装に変わった。プーシキンは『オ

ネーギン』でこう指摘している——「けれど、パンタロン、燕尾服、チョッキ、／こうした単語はどれ一つロシア語にはない Но панталоны, фрак, жилет, / Всех этих слов на русских нет」[1章26節]。これら3つの衣服とその名称はフランスからの輸入品なのである。

〈燕尾服 фрак〉[仏語の frac、独語の Frack に由来]は後々黒色だけになってしまふのだが、往時には様々な色があり、19世紀中葉まで都会の有産階級が身につけるもっともありふれた衣服であった。チチコフは、読者の前に姿を現した最初の頃、「こけもも色で斑点模様のついた燕尾服を纏っている во фраке брусничного цвета с искрой」[「死せる魂 Мертвые души」、1部2章]が、長篇の第2部に入ると、「ナヴァリノ海戦の火炎色に煙色の混じった新調の燕尾服 в новом фраке наваринского пламени с дымом」[同前、2部「終章の一部」]⁵、つまり赤茶けた色の「燕尾服」を纏っている。ソバケーヴィチは、その外見に見合った熊毛色の「燕尾服」を持っている[同前、1部5章]。

黒色の「燕尾服」は外出着であり、訪問客となると、あるいはクラブや劇場に出かける際に着用された。「燕尾服」を着ないで他家を訪問することは、招待主に対する侮辱と考えられた。チャーツキーはそのモノローグの一つで「燕尾服」の悪態をついている[「智恵の悲しみ」3幕22場]——

背後には尻尾が、前方には何だか奇妙な割りがあり、
常識にも反し、自然にも背いていて、
動きの窮屈な、しかも見栄えがさっぱりの代物。
Хвост сзади, спереди какой-то чудный выем,
Рассудку вопреки, наперекор стихиям,
Движенья связаны, и не краса лицу;

⁵ 同じ2部「終章の一部」にはまた、「ナヴァリノ海戦の火炎色の混じった煙色の布地 сукно-с! цвету наваринского дыму с пламенем」という表現も出てくる。

誰もが気づくわけではないが、グリボエドフの喜劇の主人公はこの台詞を、自分も「燕尾服」を着ていながら口に出しているのである。チャーツキーがファームウソフの夜会に出かけるとしたら、「燕尾服」以外に身につけるものなど何もなかった筈である。慣習の打破は不可能なことであった。

将校の「軍服 мундир」、官吏の〈制服 вицмундир〉(官吏に必須の正装)、従僕のお仕着せ ливрея でさえ、「燕尾服」と同じように裁断され、仕立てられていた。

しかし、19世紀中葉になると、「燕尾服」は次第に、前方の割りもなければ背後の長い燕尾もない〈フロックコート сюртук (一時は сертук と書かれた) [仏語の surtout に由来]〉に駆逐されていった。「フロックコート」は時が経つに連れて、よりゆったりとして裾が長くなり、現在の「パリトー пальто」⁶を思わせるようなものになっていった。読者が出会うトゥルゲーネフやトルストイの主人公たちは、ほとんどの場合「フロックコート」姿であり、「燕尾服」を着るのは慶事の場合だけである。地方の地主貴族たちはしばしば、慶事に「燕尾服」を着用することさえ軽蔑していた。トゥルゲーネフの短篇『風 Затишье』に登場する地方地主のイパートフは、訪問客にこう言っている——「私どものところでは、いいですか、名の日を祝うためにお互い行き来するときですら、フロックコート以外のものは着用いたしません。本当のことです！ 私どものところではもはやそれが慣わしになっているのです！ そのため近隣の郡では私どものことをフロックコート党と呼んでおります… У нас даже, скажу вам, на именины друг к другу ездят не иначе, как в сюртуках. Право! Так уж у нас заведено! В соседних уездах нас за это сюртучниками называют…» [1章]。

19世紀末頃になると「フロックコート」は、我々読者がよく知っているお馴染みの〈ブレザー пиджак〉[英語の pea jacket に由来]に取って代わられる。この英国からの舶来品は、19世紀中葉にはすでにロシアに登場しているが、

⁶ 「パリトー」は丈が膝下までの外套で、コートあるいはオーバーに相当する。

最初の頃はそれほど威厳のない、どちらかといえば若者向けの衣服であった。

「フロックコート」と「ブレザー」の相違は何か? 「フロックコート」の裾がしばしば膝よりずっと下まであって、座るときには裾をたくし上げなければならなかったとすれば、「ブレザー」は、ダーリ [4巻本詳解辞典] の説明によれば、次のようなものであった——「長めのジャンパー、短めで細身のフロックコート、着丈は大腿部まで *долгая куртка, коротенький сюртучок, по бедра*」。「ブレザー」は年輩の人々にショックを与えた。彼らには何だか軽薄で自由主義的なものにさえ感じられたのである。しかし、我々読者は、ドストエフスキーの『白痴 Идиот』の主人公ムイシキン公爵がすでに「ブレザー」を着用しているのを知っている [1編2章]。もっともムイシキンは、「ブレザー」がとうの昔にモードとなっていた外国からロシアへと帰還するのであるが [1編1章]。またサルトイコフ＝シチェドリーンの『専横な行政官たちとその愛人たち *Помпадоры и помпадурши*』に出てくる農奴解放後の県知事コゼルコフは、「洒落たブレザーを着て *в шегольском пиджаке*」いるが [6章2節]、そのことは、彼のこれ見よがしの自由主義を強調しているのである。20世紀初め頃になると「ブレザー」は、老齡でもなく保守主義者でもない人々の間ではとくに、すっかり普段着と成り切ってしまっている。「ブレザー」はまた、ゴーリキーの歴史長篇の主人公、クリム・サムギンが肌身離さず着用している (『クリム・サムギンの生涯 *Жизнь Клим Самгина*』)。第1次世界大戦頃になると「ブレザー」はほとんど完全に「フロックコート」を一掃してしまったのだった。

「フロックコート」の変種に〈**モーニングコート визитка**〉 [仏語の *visite* に由来] があった。これは、いわば「フロックコート」と「燕尾服」のハイブリッドみたいなもので、丸い燕尾がついており、色は黒か、黒でなくともいづれ黒っぽい色であった。チャーホフ作品に出てくる若い主人公たちは、公式訪問に際してはよく「モーニングコート」に身を包んでいる。「モーニングコート」はときに〈**ジャケット жакетка**〉 [英語の *jacket* に由来] とも呼ばれていた。もっとも「ジャケット」と言えば女性用の上着と考えるのが一般的である。ゴ

ンチャローフの『懸崖 Обрыв』の主人公ライスキーの「ジャケット」は、見慣れない軽薄な衣服として、県知事トイチコフを当惑させている [3部2章]。ドストエフスキーの『罪と罰 Преступление и наказание』のスヴィドリガイロフもまた「ジャケット」を着ている [6部6章]。

以上はすべて外出着である。ここで今度は19世紀の地主や退役軍人の家庭着に目を転じてみよう。

〈アルハルウク архалук〉は東方起源の衣服だが、ウエストを絞った仕立ての「半ハラート полхалат」のようなもので、染色された布地、あるいは縞模様様の布地から作られ、フック式の留金がついていた。ゴーゴリの『死せる魂』ではノズドリョーフと彼の従僕ポルフィーリーが「アルハルウク」を着て登場するし（従僕のは、おそらく、主人のお下がり） [1部4章]、またトゥルゲーネフ作品ではカラターエフ、チェルトブハーノフ、ペトウシコーフといった地主たちが [前2者はそれぞれ短篇集『獵人日記』所収の『ピョートル・ペトロヴィチ・カラターエフ』と『チェルトブハーノフとネドピュースキン』の主人公、最後は中篇『ペトウシコーフ』の主人公]、「アルハルウク」を纏って登場している。チェルトブハーノフは、「黄色の着古した、胸に黒い別珍の弾薬帯がつき、縫い目という縫い目から褪せた銀色のモールが垂れ下がったアルハルウクを纏っていた одет был в желтый, истасканный архалук с черными плисовыми патронами на груди и полинялыми серебряными галунами по всем швам」 [『獵人日記』所収『チェルトブハーノフとネドピュースキン』]。

「アルハルウク」との組み合わせがぴったりののが、〈エルモールカ ермолка〉と呼ばれる丸い室内帽で、房飾りがついていることもあった。レールモントフの『タムボフ県の出納長官夫人 Тамбовская казначейша』では、主人公について次のように言及されている [19連] ——

彼はペルシャ製のアルハルウクを着ると、

急いで窓辺に陣取った。

彼の口元ではビーズ模様の煙管が

かすかに煙っていた。

柔らかな縮れ毛の上には

緑取りされ、金糸の房飾りのついた

チェリー色のエルモールカが載っていた…

К окну поспешн он садится,

Надев персидский архалук;

В устах его едва дымится

Узорный бисерный чубук.

На кудри мягкие надета

Ермолка вишневого цвета

С каймой и кистью золотой,...

「エルモールカ」はまた、トルストイの『幼年時代 Детство』に出てくるカルル・イワーノヴィチ [2章「ママ」]、トゥルゲーネフの『父と子 Оты и дети』のエヴゲニー・バザーロフの父親も被っている [21章]。こうした室内帽はしばしば、〈スクウフィヤー скуфья〉とも呼ばれた。

貴族の家庭着の定番と言えば、まず〈シラフローク шлафрок (=独語の「シュラーフロク Schlafrock」)〉である。ドイツ起源のこの衣服は初め「寝間着」を意味したが、後に「ハラート халат」と同じものになった。「シラフローク」のまま外出したり、訪問したりすることはなかったものの、その晴れやかな外見は、傍目を意識して仕立てられているかのように見えることもあった。『父と子』ではマトヴェイ・イリイチ・コリャージンがアルカーギー・キルサーノフを迎え入れるとき、房飾りのついた豪華なビロードの「シラフローク」を着ている [12章]。ドストエフスキーの『ステパンチコヴォ村とその住人 Село Степанчиково и его обитатели』では厚顔無恥なフォーマー・オピースキンが、「外国風の裁断とはいえ、やっぱりシラフロークとしか言いようなない上着を纏い、おまけに短靴を履いて в шлафроке и, правда, иностранного постря, но все-таки в шлафроке и, вдобавок в туфлях」客間に登場する [7

章]。

減多に外出せず、何ヶ月ものになんて同じ「シラフロック」を着続ける地主もいた。トゥルゲーネフの『獵人日記』中の一編『二人の地主 Два помещика』に登場するステグウノーフは、「冬も夏も縞模様の綿入れシラフロックで通している зиму и лето ходит в полосатом шлафроке на вате」。「シラーフォルшлафор」とも呼ばれた「シラフロック」は、女性の家庭着となることもできた。タチヤーナ・ラーリナの母親は、田舎に腰を落ち着けると、「ついには綿入れシラーフォルと頭巾を／新調するまでになった И обновил накоонец / На вате шлафор и чепец」[『オネーギン』、2章33連]。

〈ハラート халат〉はさながら自宅での寛ぎ、俗物的安逸の象徴のような存在であった。プウシキンは、生き永らえた場合のレンスキーの恋の行方を思案しながら、田舎に籠り、刺子の「ハラート」を纏った彼の姿を想像している[『オネーギン』、6章、38-39連]。

オブローモフは「ハラート」を手放すことがない。ゴーゴリのアカーキー・アカーキエヴィチは、節約のために自宅では厚織り綿布の「ハラート」を着ている(『外套 Шинель』)。「ハラート」姿で「人前に на люди」出てゆくのは、軽蔑の証であると考えられた。そんな常識外れの素行を自らに許しているのは、オストロフスキーの『熱い心 Горячее сердце』に出てくる市長のグラドボーエフである[3幕1場末尾のト書き]。プウシキンの[『ペールキン物語』の一編]『駅長 Станционный смотритель』に登場する驍騎兵ミンスキーは、ペテルブルクに上京してきた小役人であるドゥニャの父親に、「ハラート」と「スクウフィヤー」姿で面会している。『罪と罰』でマルメラードフ宅の法事に「ハラート」姿でやってきた某氏は、けんもほろろに追い出されている[5部2章]⁷。

都会において外出着として「ハラート」を着ていたのは、商家の下働きする

⁷ フェドシュークは「マルメラードフ宅の誕生日に на день рождения к Мармеладовым」としているが、「マルメラードフ宅の法事に на поминки к Мармеладовым」の勘違いではないかと考え、訂正した。

使い走りの少年たちだけであった。彼らを使う商人が、節約のためにそうした格好をさせていたからである。

田舎に引っ込んだ退役将校たちはしばしば、〈**ヴェンゲールカ венгерка**〉を着用した。それは、前方にモールが刺繍され、腰周りが絞られ、毛皮飾りの施された「ジャンパー куртка」といった体の衣服で、ハンガリーの驃騎兵から借用されたものである。『死せる魂』に出てくるノズドリョーフの娘婿ミジュエフは、濃紺の「ヴェンゲールカ」を着ている [1部4章]。軍隊から休暇でモスクワへ戻った『戦争と平和』のニコライ・ロストフは、「モールをあしらった со шнурками」新調の「ヴェンゲールカ」に身を包んでいる [該当箇所不詳]。またトゥルゲーネフの短篇『嵐』において老齢のエゴール・カピトヌィチの纏っていたのは、「黒いモールがあしらわれ、立ち襟のついた、灰色のヴェンゲールカであった была серая венгерка с черными шнурами и стоячим воротником」 [2章]。

〈**カザキーン казакин**〉と呼ばれていたのは、語そのものが示すように、コサック産であることを思わせるような衣服であった。それはウエストが絞られていて、背中に幾筋かの襷があしらわれており、シングルの前合わせはフックで留めるようになっていた。「カザキーン」は女性や子供が着ることもしばしばであった。ゴゴリのイワン・ニキーフォロヴィチは通常、南京木綿製の黄褐色の「カザキーン」を纏っている [『ミルゴロト Миргород』中的一篇『イワン・イワノヴィチとイワン・ニキーフォロヴィチが喧嘩した話 Повесть о том, как поссорился Иван Иванович с Иваном Никифоровичем』、3章]。フォンヴィーギンの『旅団長 Бригадир』に出てくる国政顧問官 статский советник、それにレスコーフの『左利き Левша』の主人公もまた、「カザキーン」を着用している。

「カザキーン」に相似した衣服に、カフカス諸民族からの借用物である〈**チェクメーニ чекмень**〉がある。コリツォーフの詩作品『勇み肌 Удалец』の主人公は、「馬を武装し、／剣を研ぎ澄まし、／チェクメーニに身を包み、／森へと疾駆する Снаряжу конь, / Наточу булат, / Затяну чекмень, / Получу в леса」ことを夢想している [1連4行、全11連中の5連]。「チェクメーニ」は

騎士や馬上の獵人にはもってこいの衣服であった。「チェクメーニ」はまた、ドン河コサックの制服でもあった。

19世紀後半になると〈トゥジュールカ тужурка〉(「常に、いつも」を意味する仏語の「トゥジュール toujours (=always)」が起源。ロシア語風に「ポフセドネーフカ повседневка (=日常着)」⁸と命名することもできたはずである)が流行した。「トゥジュールカ」は、襟までボタンで留めるジャンパーのような衣服で、家庭着とも制服ともなった。1860年代以降「トゥジュールカ」は、学生や将校たちが着用した。普段着としての「トゥジュールカ」は、民主主義的な衣服とみなされた。ゴースキーの長篇『クリム・サムギンの生涯 Жизнь Клима Самгина』の登場人物の一人、ボリシェヴィキのクウトゥゾフが、この「トゥジュールカ」を着ている。

男性が下半身を包む衣服の名称は、特別な変化を蒙らなかった。今日我々が「ブリューキ брюки」、あるいは俗語で「シタヌィ штаны」と呼んでいるズボンは、長らく〈パンタロン панталоны〉[仏語の pantalon に由来]という呼名であった。これらズボンのスタイルは多種多様ではあっても、その本質に差異はなかった。「パンタロン」は初めからすでに「ブリューキ」のことであったが、古典作家にあってはこの二語の概念の混同されることがしばしばであった⁹。19世紀末頃になると「ブリューキ」が次第に「パンタロン」を圧倒するようになる。後者の語感が多少とも、流行遅れの滑稽な事物のように、やや見下された感じのコミカルな響きを持ち始めたからである。こうした事態はおそらく、女性の下着の一部もまた「パンタロン」と呼ばれており、同一の名称は望ましくないと考えられたことと関係しているであろう。トゥルゲーネフとゴンチャロフの主人公たちがほとんど「パンタロン」だけを履いているとすれば、

⁸ 「повседневка」は形容詞「повседневный (=毎日の、不断の)」(副詞は「повседневно」)に接尾辞「-ка」をつけて作った名詞。

⁹ どのように混同されたのかは分からない。辞書によれば「パンタロン」は、「ズボン」以外にも、「ズボン」より幅の狭い「ズボン下」、あるいは、後述されるように、女性の「ペチコート」のようなものも指したらしい。

チェーホフ作品の登場人物たちは通常「ブリューキ」を履いているし、またゴーリキーの作品に至ってはもはや「パンタロン」という語に出会うことがないように思われる。

「パンタロン」と「ブリューキ」を履くときには大抵、〈シトリープカштрипка〉[独語の strippe に由来]、あるいは〈ストレミョーシカ стрёмёшка〉と呼ばれるストラップが使用された。これは靴底に固定するための「編紐 тесёмка」のことで、現在では軍服かスポーツウェアにしか見られないものである。ゴーゴリの『外套』には、どうしたわけかアカーキー・アカーキエヴィチの「パンタロンの下のストレミョーシカは外れていた отпоролась внизу панталон стрёмёшка」とある。

「カラー」と「ネクタイ」についても数言費やしておこう。19世紀のロシア文学ではワイシャツの襟に縫いつけるか、あるいはホックで留める細幅の布地を意味する〈カラー воротничок〉という語が、しばしば複数形 [воротнички] で登場する。『戦争と平和』ではペーチャ・ロストフが、服装を整えながら、「自分のシャツへカラーをつけるのにてこずっている с трудом воротнички устраивает на себе」¹⁰。『父と子』には、パーヴェル・ペトロヴィチの「カラーはまるで石のようだった воротнички были словно каменные」とあるが [4章]¹¹、このぴんと張った驚嘆すべきカラーは、アンナ・カレニナの夫にとって先の尖った耳がそうであるように [トルストイ『アンナ・カレニナ』1編30章]、英国かぶれの農奴制主義者という人物像を鮮明化する役割を担っているのである。同じ「石のようなカラー каменные воротнички」はまた、『罪と罰』のドゥニャの許婚者、卑劣漢のルッジンも身につけている [該当箇所不詳]。さらに『死せる魂』には、チチコフの「白いカラーは頬にア

¹⁰ 引用箇所不明だが、3部1編21章冒頭に似たような記述がある——「その朝ペーチャは身支度に長い時間をかけ、髪を梳かしつけ、カラーを大人と同じように整えた В это утро Петя долго одевался, причёсывался и устраивал воротнички так, как у больших」。

¹¹ 引用が4章におけるバザーロフの台詞からのものだとすれば、やや不正確である。正確にはこうである——「…彼のなんとも驚嘆すべきカラーといたらまるで石のようで……этакие у него удивительные воротнички, точно каменные,…」。

クセントつけていた белые воротнички давали тон щеке」とある〔2部「終章の一部」〕。これはいったいどういうことだろうか？ここに引き上げた登場人物たちは、「二本一組のカラー пара воротничков」を同時につけていたとも言うのであろうか？

いや、そうではない。言及されているのは一本の「カラー」に違いないのだが、両端部分がとくに強調された「カラー」、つまり両端部分が長く、糊づけされていて、しばしば頬にぶつかってしまうような「カラー」のことなのである。そのため「カラー」は二本一組の装身具として理解され、長らく複数形で用いられることになったのであった。

〈＝胸飾り（ジャボ） жабо〉〔仏語の jabot に由来〕についている〈襷飾り（＝リュウシ） рюш〉〔仏語の ruche に由来〕もまたしばしば「カラー」と呼ばれた。「襷飾り」とは、男性ワイシャツの襟周りや胸にあしらわれた長いフリルのことである。『戦争と平和』のピエール・ベズウホフはこの「胸飾り」を常用している。

トゥルゲーネフ作品における「テレギンは肩まで垂れたカラーが3本ついた灰色の〈レザンゴート〉を着ていた Телегин ходил в сером «рединготе» с тремя воротниками, падавшими на плечи」という一節〔引用作品不詳〕、あるいはゴーゴリの『鼻Нос』における「まるまる1ダースものカラーをつけたのっぽの従者 Высокий гайдук с целой дюжиной воротников」という一節は、どのように理解すべきであろうか？

1ダースというのはもちろん誇張であるが、上着には数本のカラーが装着されることもあったのであって、その場合は、首から肩、さらには背中まで垂れ下がっている短めの「肩掛け пелерина」、あるいは「セーラー服カラー матросский воротник」といったものを想像してみる必要があるだろう。このように、「襟／カラー」を意味する「воротник」、あるいは「воротничок」という単純な語も、実は非常に多義性を内蔵しているのである。

〈ネクタイ галстук〉という語については、一切説明の要がないように思える。とはいえかつての「ネクタイ」は、現代のそれとはほとんど似ていない。

今日の細長く、結び目が比較的小さく、両端がともに下方に向けられるネクタイが出現したのは、やっと19世紀最後の四半世紀のことに過ぎない。

「ネクタイ」は、「ネッカチーフ шейный платок」を意味するドイツ語「ハルストーフ Halstuch」に由来するが、最初はまさしく翻訳どおりで、現代の「スカーフ кашне」[仏語の cache-nez に由来]のような代物であった。その後「ネクタイ」は次第に装身具へと変貌を遂げてゆくのであるが、初めの頃にそうした装身具的役割を果たした「ネクタイ」というのは、実は「三角巾 косынка」のことで、それは前方でふっくらと蝶結びするか、あるいは単純に結んで両端を左右に振り分けるか、あるいはチョッキの下に隠すようにしていたのであった。19世紀ロシア古典作家の肖像画を凝視してみていただきたい。まさしくそうした「ネッカチーフ」が作家たちの首を包んでいることに気づくであろう。確かに、蝶結び、あるいは単純な結び目がしばしば見えないこともある。そうした場合には、結び目が首の後方のうなじ周辺で作られるか、あるいはバックルで固定されているのである。トゥルゲーネフやドストエフスキの作品において「ネクタイ」の代わりに「ネッカチーフ」という語句にしょっちゅう出会うのは、だから偶然ではないのである。ドストエフスキの『貧しき人々 Бедные люди』の主人公マカール・デーヴウシキンも[8月4日付ワルワラ宛書簡]、そして、トゥルゲーネフの『貴族の巣 Дворянское гнездо』に登場する老音楽家レナムもまた「ネッカチーフ」を身につけている[26章]。『死せる魂』には、チチコフが県庁所在都市に到着すると、「首から虹色をした毛糸の三角巾をほどいた…<略>そして昼食を出すよう命じた размотал с шеи шерстяную, радужных цветов косынку... и велел подать обед」とある[1章]。この「三角巾」は、本来的な「防寒用 утеплительное назначение」という意義を依然失わずにいながらも、もはや同程度に装身具としての役目も果たしている「ネクタイ」だと言えよう。『死せる魂』1部の末尾では、青い縞子の「ネクタイ」を身につけたチチコフに会うことができるが¹²、これはもは

¹² チチコフが「縞子の青いネクタイ атласный синий галстук」を締めて登場するのは、「1

や装身具としての「ネクタイ」でしかない。

「ネクタイ」はときとして非常に派手なこともあった。レールモントフの『タムボフ県の出納長官夫人』では、お洒落が好きで横柄な郡の貴族団長が「全身ネクタイだらけ Весь скрытан в галстук」と評されている [44 連]。

「ネクタイ」を2本纏った男性が登場したら、読者は目を丸くしてしまうに違いない。しかし、『貴族の巢』ではゲデオノフスキーのことが、読者の前に姿を見せたとき、彼は「ネクタイを2本身につけていて、上の1本は黒、下の1本は白であった в двух галстуках — одном черном, сверху, другом белом, снизу」と記されている [2 章]。だからといってどうということもない、「ネクタイ」とはそもそも保温道具であったことを思い起こしていただきたい。初老の男性が暖気をたくさん取るために2本の「ネッカチーフ」を首に巻いたとしても、それはさほど馬鹿げたこととは言えないであろう。

さて我々が古典文学の男性登場人物たちは、外出用の上着として何を着ていたのであろうか？ 一番は〈シネーリ шинель〉という外套である。今日の「シネーリ」が必ずや制服外套を指すのに対し、かつての「シネーリ」は、軍人や文官とは関わり合いのない普段着の羅紗製外套を指すこともできたのであった。

ロシア文学の世界で我々が会おう「シネーリ」は、軍人や役人が着用しているものばかりではない。『父と子』のエヴゲニー・バザーロフも、ゴーゴリの『肖像画 Портрет』の画家チェルトコフも着ているし、『死せる魂』のチチコフでさえも「大きな熊の毛皮のシネーリ шинель на больших медведях」を纏っているのである [1 部 2 章]。これらの主人公は誰も皆、学生の制服であった「シネーリ」を（ラスコーリニコフのように）、あるいは役人の制服であった「シネーリ」を着続けているのだと反論することも可能だが、その反論は眉唾物である。その場合、トルストイの『クロイツェル・ソナタ Крейцерова соната』に登場するプロの音楽家トルウハチーフスキーが着ている「流行の

部の末尾」ではなく、2部の「終章の一部」においてである。

シネーリ модная шинель」[21章] については説明のしようがなくなってしまうからである。

(外出用外套としての)「シネーリ」と〈パリトー пальто〉[仏語の paletot に由来] という二つの概念は、革命以前のロシア文学では截然と区別されていたわけではなかった。「シネーリ」は商人たちも着ていたし、また「パリトー」は、とりわけクプリーン作品においては、将校たちによって着用されている。付言しておけば、ロシア古典文学の世界でよく出会う「厚手毛織物製シネーリ фризовая шинель」とは、〈厚手毛織物 フриз〉、つまり「フランネル байка」のような安生地で作られた「シネーリ」のことである。ゴゴリの中篇『外套 Шинель』の中で触れられているのは、この「厚手毛織物製シネーリ」のことに他ならない。

「パリトー」にも「シネーリ」にも1枚、あるいは数枚の〈肩掛けпелерина〉[仏語の pèlerine に由来] がついていた。保温と悪天候予防のためであった。

一般的な外套としての「シネーリ」は、時の経過とともに段々とお馴染みの「パリトー」に取って代わられるようになっていった。しかし、「パリトー」という語の取り扱いについては慎重を要する。それは以下のような事情による。

トゥルゲーネフの長篇『その前夜 Накануне』には、礼儀正しいスターホフの父親が、「パリトーを着て客間に入ってきた в пальто вошел в гостиную」とあり[22章]¹³、また『カラマーゾフの兄弟』には、フョードル・パーヴロヴィチ・カラマーゾフが、「短靴に古いパリトーという出で立ちで、一人テーブルについていた сидел один за столом, в туфлях и старом пальтишке」とある[2部4編2章]。さらに『過去と思索 Былое и думы』には、ガラーホフが「招待客のための夜会に赴くと、誰もが燕尾服を着用していたのに…略>彼はパリトー姿であった(он) приехал на званный вечер; все были во фраках... но он явился в пальто」という場面が描かれている[4部29章1節]¹⁴。これは

¹³ 引用が22章からのものなら、正確には次のようである——「彼は客間へパリトーとシリャーパを身につけたままで入ってきた Он вошел в гостиную в пальто и в шляпе」。

¹⁴ 引用箇所全体は次のとおりである——「彼は招待客のための夜会へ赴くと、誰もが燕尾

どう解すべきか、まさか彼らが全員、注意力散漫にしてひどい寒がり屋であるばかりか、まるで躰のなっていない人々だとも言うのであろうか？

まったくそうではない。実は、簡易「フロックコート」といった体の家庭着もまたずっと、「パリトー」と呼ばれていたのである。ゴンチャロフの長篇『オブローモフ』第2編で読者は、「家庭用パリトー в домашнем пальто」を着ている主人公を目にするし [2編5章]¹⁵、また同じ作者の長篇『懸崖』では、まずは「灰色の家庭用パリトーを纏い、ソファーに両足を乗せて座っている в домашнем сереньком пальто, усевшегося с ногами на диван」ライスキーに出会い [1編1章]¹⁶、その後はさらに「旅行用パリトーを纏った в дорожном пальто」ライスキーに出会うこともできる [該当箇所不詳]。このように「パリトー」は徐々に2つの機能を帯びるようになったのである。ところが、19世紀最後の四半世紀頃ともなると、「パリトー」という語は現代的な意味を獲得し、男性用の上着であるばかりか、女性用の上着ともなってゆくのである。

〈**Платиш**〉もまたかなり以前から外出用の上着としての役割を担っていた。現代の読者がこの語から連想するのは、何か防水性の衣服である。しかしかつては、通常袖なしで肩に羽織るようにして着る、ゆったりとしたマントのことを「**Платиш**」と呼んでいたのである。モスクワにある有名なプーшкиン記念碑では、この「**Платиш**」を纏った詩人像が造型化されて

服を着ていて、婦人連は着飾っていた。ガラーホフは招待されていなかったか、あるいは招待されたことを忘れていたのか、いずれにしても彼はパリトー姿であった он приехал на званый вечер; все были во фраках, и дамы одеты. Галахова не звали или он забыл, но он явился в пальто」。アニョク文庫版「ゲルツェン8巻選集」の第5巻では、「パリトー пальто」に「フロックコート сюртук (франц. paletot)」という脚注がつけられている。

¹⁵ 家ではいつも「ハラート」姿だが、「オブローモフは、座って本を読んだり、書き物をしたりするとき、家庭用パリトーを着用する Обломов сидит с книгой или пишет в домашнем пальто」とある。ちなみに同じ5章で、シュトルツに鼓舞され、「オブローモシチナ」からの脱却を試みようとするオブローモフは、「旅行用パリトー」を注文してもいる (引用の1頁ほど前の箇所)。

¹⁶ 引用が1編1章からのものだとすれば、正確には次のようである——「ライスキーは家庭用パリトーを纏い、ソファーに両足を乗せて座っていた Райский одет был в домашнее серенькое пальто, сидел с ногами на диване」。

いる。「防寒プラーシチ теплый плащ」というのもあった。ゴーゴリの『狂人日記 Записки сумасшедшего』のポプリーシチンの着ているのがそれである¹⁷。またゴーゴリの『外套』を読めば分かるように、「ビーバー襟 бобровый воротник」や「ビロードの折り返し бархатный отворот」のついた「プラーシチ」というものさえあった。

胴体部全体をすっぽりと覆い隠す、ゆったりとした「プラーシチ」は、フランスの劇作家ピエール・オーギュスティン・ボーマルシェの喜劇『セビリアの理髪師 Севильский цирюльник』の主人公名にちなんで、**〈アリマヴィーフ альмавива〉**と呼ばれた。トゥルゲーネフはその短篇の一つでこう指摘している——「アリマヴィーフは当時(1830年代——フェドシューク)大変な流行であった Альмавивы были тогда в великой моде」[引用作品不詳]。ロシアで古来より着用されていた、だぶだぶの袖なし「プラーシチ」は、**〈エパンチャー епанча〉**と呼ばれた。

〈クリラートカ крылатка (=インパネス)〉は男性用「プラーシチ」の変種で、「肩掛け」と一緒に着用された。「クリラートカ」は19世紀末に流行したが、読者が頻繁に目にするのは他の誰にも増してチェーホフとゴーリキーの描く主人公たちにおいてである。初老の人々はこのゆったりとした衣服を、皮肉を込めて**〈ラズマハーク размахайка〉**、あるいは**〈ラズレターイカ разлетайка〉**と呼んだ。その長くて左右にはためく「翼 крыло / крылья」を揶揄してのことである¹⁸。

¹⁷「防寒プラーシチ」という表現は作品中にはなく、ポプリーシチンの着ているのは「シネーリ」ではなかろうか。10月3日付けの日記に出てくる「シネーリ」がそれに当たるということかもしれない——「俺のシネーリはひどく汚れていて、おまけに旧式だ。今流行のプラーシチは襟が長いのに比べ、俺のは襟が短く、前合わせがダブルで、そのうえ羅紗にはまるで湯のしがされていないのだ。俺には шинель очень запачканная и притом старого фасона。Теперь плащи носят с длинными воротниками, а на мне были коротенькие, один на другом; да сукно совсем не дегазированное。」

¹⁸「крылатка」は「крыло(翼)」の形容詞「крылатый」からの、また「размахайка」は「размахаться(盛んに振り動かす)」からの、「разлетайка」は「разлетаться(飛び散る)」からの派生語である。

「ゴム引きパリトー прорезиненное пальто」がロシアに出現したのは1830年代のことで、発案者の名前にちなんで〈マキントーシ макинтош〉と呼ばれた¹⁹。ロシア古典作品中、「ゴム製防水プラーシチ резиновый, непромокаемый плащ」に言及したのは、トゥルゲーネフの『獵人日記』中の一篇『生ける聖骸 Живые мощи』をもって嚆矢とする。ゴンチャロフの長篇『懸崖』では、地主のトゥシンが「マキントーシ」を着ている〔3編13章/ただし原文ではмакинтошではなく мекинтош〕。

〈ベケーシャ бекеша〉もまた男性用の上着として着用された。「ベケーシャ」の裏地は毛皮か綿で、毛皮の縁飾りがあり、背面には襷飾りと切込みがあしらわれ、防寒用の襟がついていた。トルストイの『幼年時代』では、主人公ニコレニカ・イルテーニエフの父親は裾長の「ベケーシャ」を、また少年たち〔ニコレニカの親戚のイービン3兄弟〕は「ビーバー襟の青いベケーシャ синие бекешы с бобровыми воротниками」を着ている〔19章〕。またゴーゴリの『イワン・イワーノヴィチとイワン・ニキーフォロヴィチが喧嘩した話』は、主人公の一人が着ている「ベケーシャ」への頌詩めいたものから始まっている——「イワン・イワーノヴィチの栄えあるベケーシャ！ この上なき極上品！ えもいわれぬ子羊の毛皮！… Славная бекеша у Ивана Ивановича! отличнейшая! А какие смушки!..」。

〈レデンゴート редингот〉〔英語の riding coat に由来〕と呼ばれていたのは、ウエストの絞られた裾長の「パリトー」のことで、「肩掛け」がついていて、男性用もあれば女性用もあった。トルストイの『戦争と平和』では、イッポリート・クッラーギン公爵がシェーレル家を辞する際、「急いで自分のレデンゴートを身につけた。それは新式で踵の下までであった торопливо надел свой редингот, который у него, по-новому, был длиннее пятки」(1805年の出来事)

¹⁹ 英国のチャールズ・マッキントッシュ Charles Mackintosh は1822年にゴム引き生地「マッキントッシュ・クロース Mackintosh cloth」を発明し、1830年に会社を設立して「マッキントッシュ・クロース」で作ったコートを開発し始めるが、そのコートは瞬間にヨーロッパ中に流行したとのことである。

[1部1編6章]。ゴーゴリの『ネフスキー大通り Невский проспект』では、「ピンクや白、薄青色の縞子のレズンゴートを着た в розовых, белых и бледно-голубых атласных рединготах」乙女たちが、ペテルブルクの目抜き通りをそぞろ歩いている。

3 節

都会の女性衣裳

Женская городская одежда

どんな「ドレス платье」、「ブラウс блузка」、「半コート кофта」、「スカート юбка」も、当然のことながら、ほぼ10年周期でそのスタイルを変化させたが、それでも主要な特徴は保持していたので、とくに注釈を加える必要はあるまい。とはいえ、女性衣裳のうちのいくつかは過去の遺物と化しており、ただ芸術作品を通して往時の姿を偲ぶことができるだけである。

女性は家庭では〈ドゥシェグレイカ душегрейка〉を着ていた。これは腰丈の短い防寒「半コート」で、要塞司令官の妻、マーシャ・ミローノヴナの母親 [『大尉の娘』、3章「要塞」、それにツァールスコエ・セローにいるエカテリーナ女帝その人が着用している [同前、14章「査問」]。こうした「半コート」はまた〈テログレイカ телогрейка〉とも呼ばれた [ちなみに、マーシャの母親の着ていたのは「テログレイカ」、女帝のは「ドゥシェグレイカ」と記されている]。

〈カツァヴェーイカ кацавейка〉、あるいは〈クウツァヴェーイカ куцавейка〉と呼ばれていたのは、丈の短い、かき合わせ式の「半コート」で、襷飾りやウエストの絞りはなく、袖がついていて、裏地には毛皮か綿が使われていた。『戦争と平和』では、裕福なモスクワの貴族夫人、マリヤ・ドミートリエヴナ・アフロシモワが、早朝から「クウツァヴェーイカ」を身につけている [2部5編6章]。また『罪と罰』の金貸老婆はいつでも「カツァヴェーイカ」を着ている [1部1章]。フェドートフの名画『少佐の結婚申し込み Свадьба майора』では、花嫁の母親が「カツァヴェーイカ」姿で描かれている

る²⁰。

〈カポート капот〉[仏語の capote に由来]と呼ばれていたのは、ゆったりとした、かき合わせ式の衣服で、袖はついていたが、ウエストの絞りはなかった。ゴーゴリ作品に登場する既婚女性たちが「カポート」を常用しているが、とりわけマニーロフの妻については、「淡い色のシルク製のカポートがよく似合っていた хорошо сидел матерчатый шелковый капот бледного цвета」と記されている[1部2章]。「カポート」には家庭用もあれば外出用もあり、さらには「防寒カポート теплый капот」というものまであった。プウシキンの『吹雪 Метель』では、マーシャが「防寒カポート」に「ショール шаль」姿で秘密の結婚式場へ出かけているし、また『スペードの女王 Пиковая дама』では、リザヴェータ・イワーノヴナが伯爵夫人と一緒に出立する前に「カポート」を身につけている。「ハラート」に似た男性用の上着もまたときとして「カポート」と呼ばれることもあった。19世紀も末頃になると、「カポート」は着られなくなってしまった。

19世紀にもっともポピュラーだった女性用の上着は、〈サロープ салон〉[仏語の salope に由来]と〈ブウルヌウス бурнус〉[仏語の burnous に由来]であった。「サロープ」は、ゆったりとして裾丈の長いマントのような「上っ張り накидка」で、腕を出すための切り抜き穴か、あるいは小さな袖がついていた。とくに重宝がられたのは「黒テンのサロープ соболий салон」であった。オストロフスキー作品の商人階級の夫人や娘たちは、「サロープ」を着ているか、さもなければ着ることを夢想している。「サロープ」は長い間、ある種の威厳の目印だと考えられていた。都会ではあらゆる階級の女性が「サロープ」を着ていた。チェルヌィシエフスキーの長篇『何をなすべきか Что делать?』のヒロイン、ヴェーラ・パーヴロヴナとその母親は「サロープ」を着て劇場へ出かけている[1部1章]。しかし、「サロープ」は次第にその魅力を喪失し、その着用は悪趣味、貧困、小市民性の目印とみなされ、貧しい女乞食、あるいは

²⁰ 10章「貴族と農民以外の階級」の付録を参照のこと（「文化と言語」69号???頁）。

は下品な女金棒引きのことを、「サロープ党 салопница」と呼ぶようになっていったのであった。19世紀末ともなると、「サロープ」は廃れてしまうことになる。

「サロープ」と異なり、「ブルヌゥース」は「ドレス」よりもずっと丈の短い衣服であった。それは腰丈よりちょっと長いくらいで、通常裏地に綿が使われ、袖がついていた。「ブルヌゥース」が流行し出したのは19世紀中葉のことである。オストロフスキーの喜劇『新しい友人二人よりも旧友一人 Старый друг лучше новых двух』では、プウリヘーリヤ・アンドレーエヴナがこう言っている——「今日ではもう誰もがブルヌゥースを着ているんですよ、例外なく誰もがです。いったい今日ブルヌゥースを着ない人なんていますかしら? Ведь уж все нынче носят бурнусы, уже все; кто же нынче не носит бурнусов?」[1幕4場]。オストロフスキー作品に登場する多くの若いヒロインたちが「ブルヌゥース」を身につけており、ドストエフスキー作品でも、『虐げられた人々 Униженные и оскорбленные』のナターシャが「ブルヌゥース」を着ているし[該当箇所不詳]、また『罪と罰』のソーニャ・マルメラドワはもちろん、彼女の9歳の妹ですら、「古ぼけた薄い毛織物のブルヌゥースを着ている в ветхом драдемавовом бурнусике」のである[1部2章]。しかしながら、「ブルヌゥース」は「サロープ」同様、19世紀末頃には廃れてしまう。ただし、女性用防寒着を仕立てていた女性裁縫師たちは、その後も長らく、「ブルヌゥース党 бурнусница」と呼ばれ続けたのであった。

外出用の正式衣裳は、<ロブローン роброн> [仏語の robe rond に由来] だと考えられていた。「ロブローン」は、丸い「引き裾 шлейф」のついた、ゆったりとした「ドレス」のことである。『大尉の娘』のマーシャ・ミローノヴナは、女帝に召喚される前に旅行衣裳を黄色の「ロブローン」に着替えようとするが、その時間を見出せずにいる[14章「査問」]。

19世紀の末頃には、それほど長い間ではなかったが、<ワテルブルーフ ватерпруф> [英語の waterproof に由来] という、英国から渡来した女性の夏用「バリトール」が流行した。この語の直訳は「防水加工」であるが、実際の「ワ

テルブルーフ」は必ずしもそうとは限らなかった。チェーホフの短篇『悪天候 Ненастье』では、弁護士クワシンの妻と姑が「ワテルブルーフ」を纏い、別荘の茶の間で食卓についている。さらにチェーホフの『浮気な女 Попрыгунья』のヒロインは、「ワテルブルーフ」姿で客を迎え入れてさえる²¹。この衣服にはおそらく、どこか潜在的に小市民的な感じがあったのだと察せられるが、だとすれば、チェーホフの短篇『ヴォロージャ Волюдя』の主人公であるギムナジウム生が母親に向かってこう叫んでいるとしても、それは決して偶然のことではなからう——「間違ってもこのワテルブルーフを着ようなんて思わないでよ！ Не смейте носить этого ватерпруфа!」。

19世紀に大流行したのは、露出された肩に防寒と見栄え目的で掛けられた多種多様な「上っ張り」で、その代表格は〈マンチーリカ/マンチーリヤ мантилька / мантилья〉〔西語の mantilla、あるいは羅語の mantellum に由来〕と呼ばれる、袖なしの丈の短いケープのような「上っ張り」である。オストロフスキーの戯曲に出てくる商人の娘たちも、トゥルゲーネフやゴンチャロフの長篇に登場する貴族の奥方や娘たちも、コケティッシュな「マンチーリカ」を羽織っている。

ドストエフスキー作『貧しき人々 Бедные люди』のヒロイン、ワーレニカは、劇場へ出かけるとき、〈襷飾り фальбала / фалбала〉〔仏語の falbala に由来〕で縁取りされた薄手の「半コート」である〈カンズウ канзу〉〔仏語の canezou に由来〕を着て〔9月27日付書簡〕、その上に黒い「マンチーリカ」を羽織っている〔7月6日付書簡〕。同じ作家の『白痴』ではナスターシャ・フィリッポヴナが、悪寒に襲われたとき、「マンチーリヤ」を要求しているし〔1編13章〕、『白夜 Белые ночи』のヒロイン、ナーステニカは、「コケティッシュな黒いマンチーリカを着て в кокетливой черной мантильке」登場する〔「第一夜」〕。

²¹ 浮気なオリガは、5章で「ワテルブルーフ」を纏っているが、それは旅から帰宅した場面で、客を迎え入れたりとはしていない。フェドシュークの勘違いと思われる。

袖なしの長い「上っ張り」は、それを流行らせたフランスの俳優の名字〔タルマ Talma〕にちなんで、〈ターリマ тальма〉と呼ばれた。「ターリマ」を着た人物がもっとも頻出するのはチェーホフ作品で、『かもめ Чайка』のニーナ・ザレーチナや『三姉妹 Три сестры』のマーシャも、「ターリマ」を着用している。『桜の園 Вишневый сад』に出てくる女中のドゥニャーシャはエピホードフに、湿っぽいからと言って、「ターリモチカ тальмочка」〔тальямаの指小形〕を持ってきてくれるよう頼んでいる〔2幕〕。

喪に服す場合や葬式のときは、女性衣裳の袖と襟に〈プレレーズィ (= 喪章) плерезы〉(仏語「ブルルールズ pleureuses (泣き女たち)」に由来)が縫いつけられた。これは、事が終わると外される、特別な飾り布であった。トルストイの『幼年時代』にはこう記されている——「喪章が縫いつけられた黒いドレスに身を包んだリューボチカは、全身を涙で濡らし、頭を垂れていた Любочка, в черном платье, обшитом плерезами, вся мокрая от слез, опустила головку」〔27章「悲しみ」〕。「喪章」の色についてはどこにも指示されていないから、読者は黒いものと思いがちであるが、実際には必ずや白くなければならなかった。ときとしてまた、男性が「喪章」を衣服に縫いつけることもあった。

女性の凝った「シャルフ (= マフラー) шарф」は、19世紀初めにはまだそのフランス語 [écharpe] 起源を保っていて、〈エシャルプ эшарп〉と呼ばれていた。グリボエードフの『智恵の悲しみ』ではそのように書かれ、かつ発音されている〔3幕7場〕。

ロシア古典文学において、女性の被り物の中で一番よく出会うのは〈チェペーツ чепец〉、およびその指小形〈チェーブチク чепчик〉である。貴族夫人や官吏の妻たちはこの頭巾風の帽子を、家庭でも訪問先でも、客を迎えるときでも外出するときでも、いつでも被っていた。『智恵の悲しみ』には、次のような有名な一節がある——「ご婦人方は『万歳!』と叫び、／チェーブチクを宙へ放り投げたものでした! Кричали женщины: ура! / И в воздух чепчики бросали!」〔2幕5場〕。既婚女性が被り物を身につけずに見ず知らずの人の前

に姿を現すのは、不躰なこととされた。ときには若い乙女が「チェペーツ」を被ることもあったが、既婚の貴族女性の場合は被ることが義務づけられていた。商人か、あるいは小市民に属する女性たちは、「チェペーツ」を異国の新製品か何かのように見ていた。オストロフスキーの喜劇『貧は罪ならず Бедность не порок』のペラゲーヤ・エゴーロヴナは、商人の夫が強く要求するにもかかわらず、「チェプチュク」を被ることを断固拒絶している〔1幕3場で彼女が手代のミーチャに向かって言う台詞〕。都市の既婚女性は、「チェプチュク」の代わりに「頭巾用スカーフ головной платок」を被っていた。民族的な風習が要求したからである。

貴族夫人は特別な恩恵の印として、側近の屋敷務めの下女に「チェペーツ」を下賜することがあった。『貴族の巣』では、家政を取り仕切る女中のアガーフィヤが、奥方の不興を買って縫い子に格下げされ、「チェペーツの代わりにスカーフを頭に被るよう命じられた…〈略〉… 貴族夫人はずっと前に彼女を許していて、その失寵の境遇を解いてやり、自分の被っていたチェペーツをプレゼントした。しかしアガーフィヤ自身はスカーフを脱ごうとしなかった велели ей вместо чепца носить на голове платок... Барыня давно ей простила, и опалу сложила с нее, и с своей головы чепец подарила; но она сама не захотела снять свой платок」〔35章〕。

読者がとりわけ頻繁に「チェペーツ」を目にするのは、中年から初老にかけての既婚女性や寡婦たちの装束においてであり、たとえば『懸崖』の老婆や『獵人日記』のタチャーナ・ボリーソヴナ〔タチャーナ・ボリーソヴナとその甥〕、それに『貴族の巣』のペストワ、『オネーギン』のラーリナ夫人などが「チェペーツ」を被っている。「チェペーツ」は家庭で普段に着用する被り物であった。外出するとなると、「シリャーパ шляпа」という、つばがぐるりについた帽子、あるいは〈ベレー帽 берет〉〔仏語の *béret* に由来〕を被るのが常だった。『オネーギン』のタチャーナは上流社会の舞踏会に、「キイチゴ色のベレー帽を被って в малиновм берете」出かけている〔8章17連〕。

4 節

農夫の衣裳

Мужская крестьянская одежда

もっともポピュラーな農夫用衣裳と言えば、それは〈カフタン кафтан〉であった。ロシアの「カフタン」と西ヨーロッパのそれとの違いについては、すでに本章の冒頭で説明してある。ただ一つ付け加えておかなければならないのは、農民の「カフタン」が実に多種多様であったということである。すべての「カフタン」に共通していたのは、前合わせがダブルであったこと、裾丈が長かったこと、袖がついていたこと、胸部が咽喉元まで覆われていたことである。丈の短い「カフタン」は〈半カフタン полукафтан / полукафтанье〉と呼ばれた。ウクライナ式「半カフタン」は〈スヴィートカ свитка〉[「スウィータ свита」の指小形]と呼ばれたが、この語にしょっちゅう出会うことのできるのはゴーゴリの作品においてである。「カフタン」のほとんどが灰色か青色で、安生地(南京木綿 нанка) (荒い綿織物)、あるいは〈薄手麻布 холстинка〉(手織りの亜麻織物)で作られていた。「カフタン」の腰部には、原則的に、〈クウシャーク кушак〉と呼ばれる、「カフタン」とは違った色の布地で作られた長い帯が巻かれた。「カフタン」はまた通常左前仕立てで、ホックで留めていた。

ロシア古典文学は読者に、ロシア式「カフタン」の勢揃いしたクローク・ルームを提示してくれる。読者はそこで「カフタン」姿の農民や地主領地の管理人、小市民、商人、御者、屋敷番はもちろん、稀には「カフタン」を着た地方の地主貴族にさえ出会うのである(トゥルゲーネフ作『獵人日記』²²)。

ロシア人がロシア語を読めるようになってまもなく遭遇する初めての「カフタン」、すなわちクリローフのかの有名な『トリシカのカフタン Тришкин

²² たとえば『郷土オフシャニコフ』で話題にされる地主、ワシーリー・ニコラーイチ・リュボズヴォーノフは、「まるで御者の着るようなカフタンを纏っていた」とされている。さらにその少し先には、御者のような格好をして召使や百姓たちと一緒に酒を飲んだりする地主たちについての言及もある。

кафтан』とはいったいどのようなものなのだろうか？ トリーシカは明らかに無産層の貧乏人であった。さもないければ自分の古い穴の開いた「カフタン」を、自ら作り直す必要などなかったであろう。とすれば、それはごくありふれたロシア式「カフタン」なのであるだろうか？ いや、まったくそうではない。トリーシカの「カフタン」には、農民の「カフタン」とは古来縁のない「燕尾фалда」がついているからである。ということはつまり、トリーシカが作り直すとしているのは、主人から下賜された「ドイツ式カフタン」だということになる。その意味で、クルィローフがトリーシカの作り直した「カフタン」の丈と、これまた貴族の典型的衣服である「カムゾール」の丈を比べているのは、偶然でも何でもないのである。

面白いのは、無教養な女性にとって男性の着る長袖の衣服がどれもこれもすべて「カフタン」に見えていた、ということである。ゴーゴリの戯曲『結婚 Женитьба』では、女仲人がポトコレーシンの「燕尾服」を「カフタン」と呼んでいるし [1幕8場]、『死せる魂』では、コロボチカがチチコフの「燕尾服」を「カフタン」と呼んでいる [1部3章]。

〈**Пощёфка поддёвка**〉は「カフタン」の変種である。この衣裳について最良の描写を残したのは、大のロシア風俗通であった劇作家のオストロフスキーである。彼は俳優ブウルヂン宛の書簡に次のように書いている——「君が、背中に襷飾りがあって、左前にホックで留めるカフタンのことをポщёфкаと呼ぶなら、ヴォスミブラートフとピョートルはきっとポщёфкаを着ていなければなりません Если ты называешь поддёвкой кафтан со сборками сзади, который застёгивается на одну сторону на крючках, то именно так должны быть одеты Восмибратов и Петр」[1871年10月21日付]。ここで言及されているのは、喜劇『森 Лес』の登場人物である商人とその息子の服装のことである²³。

²³ イワン・ペトロフ・ヴォスミブラートフは森林を売買する商人であり、ピョートルはその息子である。

「ポツヂョーフカ」はありきたりの「カフタン」よりも上品な衣服とみなされていた。袖なしの洒落た「ポツヂョーフカ」を「半シューバ полушубок」[「シューバ шуба」は「毛皮外套」のこと]の上に着込んでいたのは、裕福な御者たちである。富裕な商人も「ポツヂョーフカ」を着たし、また貴族の中にも「生活簡素化 опрощение」のために「ポツヂョーフカ」を着用する者がいた。たとえば、自分の持ち村にいたときのコンスタンチン・レーヴィンがそうである(『アンナ・カレーニナ』[2編13章]。興味深いのは、同じ長篇の中で幼いセリョージャが、時流に乗って、ある種のロシア民族衣裳のようなものとして、「装飾りのついたポツヂョーフカ」を作ってもらっているということである[5編26章]。

〈シビールカ сибирка〉と呼ばれたのは、丈の短い「カフタン」である。普通は青色で、ウエストが絞られており、背に切れ込みはなく、低い立ち襟がついていた。「シビールカ」を着ていたのは、小商店主や商人たちだが、『死の家の記録 Записки мёртвого дома』におけるドストエフスキーの証言によれば、ある種の囚人たちもこの上着を入手していたことになる[1部3章「最初の印象」]。

〈アジャーム азям〉も「カフタン」の変種である。薄手の生地で作られ、着用は夏に限られていた。

農民の男女を問わない上着として活躍したのは、〈アルミャーク армяк〉である。これまた「カフタン」の変種で、工場生産された厚手の羅紗か荒織りの毛織物で作られていた。豪華な「アルミャーク」の生地は駱駝の毛であった。「アルミャーク」は余裕を持たせて裁断された、ゆったりとした裾長の衣服で、「ハラート」を想起させた。トゥルゲーネフの描く『クラシーワヤ・メーチのカシヤン Касьян с Красной Мечи』(『獵人日記』所収)は、黒っぽい「アルミャーク」を着ている。読者がよく「アルミャーク」を目にするのは、ネクラソフ作品の農民たちにおいてである。『ヴラス Влас』の初連は次のように始まる――

襟をはだけたアルミャークに身を包み、

頭には何も被らず、
町をゆっくりと歩いてゆくのは
白髪の人、グラスおじさん。
В армяке с открытым воротом,
С обнажённой головой,
Медленно проходит городом
Дядя Влас — старик седой.

また、ネクラースフが描いた、役所の「表玄関脇で у парадного подъезда」
順番待ちをする農民たちの格好は、次のようである [『表玄関脇で考えたこと Раз-
мышления у парадного подъезда』、24-27 行目] —

日焼けした顔と手、
肩にはぼろぼろのアルミヤーク、
曲った背には背負袋、
首には十字架、[自分で編んだ
草鞋を履いた] 足には血が滲む。
Загорелые лица и руки,
Армячишка худой на плечах,
По котомке на спинах согнутых,
Крест на шее и кровь на ногах,
[В самодельные лапти обутых]

トゥルゲーネフの『ムウムー Муму』には、ゲラーシムが奥方の要望を果たそうと、「ムウムーに自分の重いアルミヤークを掛けてやった накрыл Муму своим тяжелым армяком」とある²⁴。

²⁴ この引用はやや不正確である。正しくは次のようである — 「彼は自分の部屋へ入り、助

「アルミャーク」は御者たちに愛用された。彼らはそれを冬に「半シューバ」の上に着たのであった。トルストイの中篇『ポリクウシカ Поликушка』の主人公は、町へ金を受け取りに「アルミャークとシューバを着て в армяке и шубе」出かけている [11章]²⁵。

「アルミャーク」よりもずっと原始的だったのが〈ジプун зипун〉である。それは荒い織物から——大抵は手織りの羅紗から——作られ、襟なしで、裾広がりになっていた。現代の読者が「ジプун」を目にしたら、こう言うに違いない——「バラホーンもどきだね Балахон какой-то」[「バラホーン балахон」は麻布製のゆったりとした上着のこと]。貧しい農民を歌ったコリツォーフの詩作品には、次のような一節がある [引用作品不詳]——

杭も持たず、屋敷も持たず、
財産と言えば、ただジプунのみ。
Ни кола, ни двора,
Зипун — весь прожиток.

「ジプун」は、酷寒や悪天候から身を守るための農民外套の一種であった。女性も身につけた。「ジプун」は貧困を象徴するものと考えられていた。チェーホフの短篇『大尉の軍服 Капитанский мундир』では、酔った仕立屋のメルクウロフが、かつての社会的地位の高い顧客を自慢しながら次のように叫

けた子犬をベッドに寝かせ、自分の重いアルミャークを掛けてやると、初めに厩舎へ走って行って糞を、それから食堂へ走っていて茶碗一杯のミルクを取ってきた Он вошел в свою каморку, уложил спасенного щенка на кровати, прикрыл его своим тяжелым армяком, сбегал сперва в конюшню за соломой, потом в кухню за чашечкой молока。ちなみにゲラーシムは偶々拾った子犬を介抱してやっているのもであって (この時点ではまだムウムーと名づけられてもいない)、「奥方の要望を果たそうと」というのは、フェドシュークの勘違いではなからうか。

²⁵ ただし11章に出てくるのは、「アルミャークとシューバを着て в армяке и шубе」ではなく、「アルミャークとシューバは脱いで、傍にきちんと畳んであった Армяк и шуба были сняты и порядком сложены подле」という一文。

んでいるが、それも理由のないことではないのである——「ジプウンを仕立てるくらいなら、死んだほうがましでもんだ！ Пушай лучше помру, чем зипуны шить!」。

ドストエフスキーは『作家の日記』最終号で、貧しい労働者を念頭に、こう呼びかけている——「灰色のジプウンを着た人々の言い分に耳を傾けよう。彼らには何かしらの主張があるはずだから Дослушаем серых зипунов, что-то они скажут」²⁶。

〈チューイカ чуйка〉もまた「カフタン」の変種の一つであった。これは、「ハラート」風に裁断された、羅紗製で裾長の「カフタン」のことである。「チューイカ」をもっともよく目にするのは商人や小市民、つまり居酒屋の主人に職人、商店主といった人々においてである。ゴーリキーの作品に次のような一節がある——「チューイカに胴長の長靴といった小市民風の格好をした、とある赤毛の男が入ってきた Пришел какой-то рыжий мужчина, одетый мешанином, в чуйку и высокие сапоги」[引用作品不詳]。

ロシアの日常生活や文学の世界において「チューイカ」という語はしばしば、無学で目先の利かない人間の提喩として——つまり、外見的特徴によってその所有者を表す比喩として——使用された。マヤコフスキーの物語詩『ハラショー！ Хорошо!』に、次のような一節がある [15 節]——

サロップが

チューイカに

言い、

チューイカが

²⁶ 『作家の日記』1881年1月号の1章5節にある次の一節を変形した引用ではないかと思われる——「灰色のジプウン着ている人々を呼び出し、彼ら自身に彼らの窮乏について、彼らに何が必要かについて尋ねてみるがいい。そうすれば彼らは諸君に真実を語り、我々皆が、おそらくは初めて、正真正銘の真実を耳にすることになるであろう Позовите серые зипуны и спросите их самих об их нуждах, о том, чего им надо, и они скажут вам правду, и мы все, в первый раз, может быть, услышим настоящую правду」。

サロープに言う。

Салоп

Говорит

чуйке,

чуйка

салопу:

ここでの「チューイカ」と「サロープ」はともに、時代遅れの頑迷な住民の同義語となっている。

荒織りの染色されていない羅紗で作った自家製「カフタン」は、くセルミャーガ *сермяга* と呼ばれた。チェーホフの短篇『スヴィレリ (木や葦から作られるフルート型の民族楽器) *Свирель*』には、「セルミャーガ」を着た老齢の羊飼いが描かれている。形容辞「セルミャーガの *сермяжный*」はここに由来し、それは時代遅れで貧しいロシア、すなわち「貧農のルーシ *сермяжная Русь*」という表現に繋がっている。

ロシア衣裳の歴史家たちは、農民衣裳には厳格に定められた恒久的名称など存在しなかったと指摘している。名称の多くは各地方の方言に連動していた。いくつかの同じ衣服が方言によって違った名称で呼ばれることもあり、また逆に、異なった衣服が異なった地方で同じ一つ名称を持っていることもあった。この事実はロシア古典文学によっても裏づけられる。そこでは「カフタン」、「アルミャーク」、「アジャーム」、「ジプウン」等々がしばしば混同されるばかりか、ときとしてそうした混同が同じ一人の作家の作品において生じている場合さえあるからである。しかしながら本書の責務は、そうした様々な種類の衣裳についてもっとも一般的で、かつ人口に膾炙した特徴づけを行なうことである。

農民の被り物の一つに、つい最近失われてしまったばかりのくカルトウース *картуз* がある。これは縁取りとつばの必ずついた帽子で、色は大抵黒っぽく、換言するなら、「略式フッラーシカ *неформенная фуражка*」といった趣で

ある。19世紀初めにロシアに現れた「カルトゥース」はあらゆる階層の男性に着用されたが、最初は地主貴族が被り、後に小市民や農民も被るようになったのであった。ときとして防寒用の耳カバーつき「カルトゥース」というのもあった。『死せる魂』のマニーロフは、「耳カバーつきの防寒カルトゥースを被って в тёплом картузе с ушами」登場する [1部7章]。トゥルゲーネフの『その前夜 Накануне』では、インサーロフが「耳カバーのついた奇妙なカルトゥース странный, ушастный картуз」を被っているし [11章]、『父と子』では、ニコライ・キルサーノフとエヴゲニー・バザーロフが「カルトゥース」を被っている²⁷。プーシキンの『青銅の騎士 Медный всадник』の主人公エヴゲニーの頭に載っているのは、「くたびれたカルトゥース изношенный картуз」である [2編]。チチコフはまた「防寒用カルトゥース тёплый картуз」を被って旅をしている [1部1章]。ときには「正式フッラーシカ форменная фуражка」が、将校の制帽さえも含めて、「カルトゥース」と呼ばれることがあった。たとえばブニン は、「フッラーシカ」の代わりに「カルトゥース」という語を使っている。

貴族には特別な、赤い粹取りをした「正式フッラーシカ」があった。

ここで読者の皆さんに、予めお断りしておかなければならないことがある。かつて「カルトゥース」という語には別な意味もあったということである。『検察官 Ревизор』ではフレスタコフがオーシブに、「カルトゥース」を覗いてタバコの有無を調べてくるよう命じているが [2幕2場]、ここで話題になっている「カルトゥース」とは、被り物のことではもちろんなく、タバコを入れておくための袋、つまり「キセート кисет」のことなのである。

一介の労働者、とりわけ御者は、背高の丸い「シャープカ (縁無帽) шапка」を被った。これは、当時流行っていた「そば粉の焼餅 лепёшка, испеченная из гречневой муки」に形が似ていたので、〈グレーチネヴィク гречневик〉と呼

²⁷ バザーロフは2章では「フッラーシカ фуражка」、5章では「シリャーパ шляпа」、9章では「カルトゥース картуз」を被っていることが、またニコライ・キルサーノフは2章で「カルトゥース」を被っていることが分かる。

ばれた²⁸。農民の「シャープカ」はすべて、〈シリク шлык〉と蔑称された。ネクラソフの物語詩『誰にロシアは住みよいか Кому на Руси жить хорошо』に次のような一節がある [1編2章「村の定期市」] ——

まあ見ているがいい、

農民のシリクがどこへ消えてゆくのかを。

Гляди, куда деваются

Крестьянские шлыки:

定期市となれば農民たちは、居酒屋の主人に自分の「シャープカ」を担保として預け、後々買い戻すのが常であった²⁹。

履物の名称は特別な変化を蒙らなかった。短靴は、男性用女性用ともに、古くは〈バシマキー башмаки〉と呼ばれていた。「ボチーンキ (アングルブーツ) ботинки」が登場するのは後年のことで、「バシマキー」と本質的になんら変わるところのない代物だったが、デビュー時は女性用であった。トゥルゲーネフやゴンチャロフ、トルストイ作品の登場人物たちが履いているのは、現在呼び習わされているような「ボチーンキ」ではなく、〈ボチーンカ ботинка〉である³⁰。ちなみに、「ボチーンキ」は1860年代以降、男性にとってほとんど必須とも言うべき「サバギー (長靴) сапоги」をみるみるうちに駆逐していった。「サバギー」やその他の靴用の高価な皮革は、〈ヴィロストコワヤ・コージャ выростковая кожа〉(一歳未満の牛や鹿の子の皮革)、あるいは〈オポー

²⁸ 「グレーチネヴィク гречневик」は「グレーチハ (そば) гречиха」の形容詞形「グレーチネви гречневый」に接尾辞「-ик」をつけて派生させた名詞で、「そば製品」ぐらいの意かと思われる。

²⁹ 詩人文庫版の3巻本のネクラソフ全詩集では、「シリク шлык」について以下のような注がある —— 「先端の尖った農民のシャープカ остроконечная крестьянская шапка」(Н. А. Некрасов. Полное собрание стихотворений в трех томах. Библиотека поэта. Большая серия. 2-е изд. Т. 3, стр. 454.)

³⁰ 履物はすべて、たとえば「ボチーンキ ботинки」(単数形は「ボチーнок ботинок」)のように、通常複数形で表現するが、「ボチーンка ботинка」は単数形である。

イコワヤ・コージャ опойковая кожа〉（植物飼料に移行する前の哺乳期の牛や鹿の子の皮革）と呼ばれた。

〈ナポール набор〉、あるいは「ズボールキ сборки」と呼ばれる細かな襞模様が胴体部にほどこされた「サパギー」は、とりわけでの贅沢品とみなされた。

40 年ほど前まで [ほぼ 1960 年前後まで] 多くの男性はまだ、〈シチプレートィштилеты〉[独語の Stiefelette に由来] と呼ばれる編み上げ靴を履いていた。編み上げ靴という意味での「シチプレートィ」には、ゴリキーやブニンンの作品でも出会うことができる。だが読者は、ドストエフスキーの長篇『白痴』の冒頭においては、ムィシキン公爵のことが次のように描写されていることを知っている——「彼の足にはシチプレートィのついた、厚いゴム底のバシマキーが履かれていた。すべてがロシア的ではなかった На ногах его были толстоподошвенные башмаки со штиблетами — все не по-русски」[1 編 1 章]。現代の読者ならこう推論するであろう——「ロシア的じゃないばかりか、まったく人間的でもないな。一人の人間が二足の靴を履くものか」と。しかし、ドストエフスキーの時代の「シチプレートィ」は、「ゲートル гетры」、つまり履物の上部に巻く防寒用のカバーを意味していたのである。この西欧渡来の珍品は、ロゴージンの毒舌を誘発するばかりか [1 編 1 章]、次のようなムィシキン誹謗の寸鉄詩が新聞に掲載されるという事態さえ招来してしまうのである [2 編 8 章]——

狭いシチプレートィを巻いて帰国し、

遺産の百万ルーブリを手に入れた…

Возвратясь в штиблетах узких,

Миллион наследства взял,..

5 節

農婦の衣裳

Женская крестьянская одежда

古来、農村における女性衣裳としての役割を担い続けてきたのは、「肩飾り *наплечье / наплечник*」と「腰帯 *поясок*」のついた、丈が長くて袖のついていないドレス、〈サラファーン *сарафан*〉である。プウガチョーフ党がペロゴロツカヤ要塞を攻撃する直前、要塞司令官は妻にこう言っている——「もしも間に合うようだったら、マーシャにサラファーンを着せてやってくれ *Коли успеешь, надень на Машу сарафан*」(『大尉の娘』[7章「強襲」])。このデテールには、現代の読者は見逃しがちだが、本質的な要素が含まれている。要塞司令官は次のように期待しているからである——娘が農村の衣裳を纏っていれば、要塞が占領されたとしても、農村の乙女たちの群に紛れ込むことができ、貴族の娘という正体、大尉の娘という正体を見破られずに済むであろう、と。

既婚女性は〈パニョーフ *панёва*〉、あるいは〈ポニョーフ *понёва*〉を着た。これは手織りの毛織物で作った、通常は縦縞、あるいは格子縞模様の「スカート *юбка*」で、冬になると「テログレーイカ (=防寒胴着) *телогрейка*」と一緒に着用された。オストロフスキーの喜劇『身内同士は後勘定 *Свои люди — сочтёмся*』では、手代ポドハリュージンが商人の妻ポリショーフのことを嘲めるかのように、「ポニョーフ党と紙一重 *чуть-чуть не понёвница*」と言っているが、これは彼女が庶民の出であることを仄めかしているのである [2幕7場]³¹。トルストイの『復活 *Воскресение*』には、村の教会に集まった農婦たちは「パニョーフ」姿だった、と記されている [1編15章]。農婦は、日常生活では〈ボヴォーイニク *повойник*〉と呼ばれるスカーフを頭に巻きつけ、祝祭日には〈ココーシニク *кокошник*〉、あるいは〈キーカキカ/キーチカ *кичка*〉

³¹ フェドシュークの勘違いと思われる。確かにこの台詞は2幕7場に出てくるが、ポドハリュージンではなく、女仲人ウスチーニヤ・ナウモヴナのものだからである。

を被った。「ココーシニク」は、額上に半円盾形のかなり複雑な拵え物があり、その後方に本体部が続いた被り物であり、一方「キーカ」は、「角 розг」と呼ばれる前方に張り出した突起部のついた被り物である。

既婚農婦が被り物を一切つけずに人前に出ることは、大変な恥辱と考えられていた。「頭髮を剃き出しにする опростоволоситься」が「恥をかく опозориться」、「顰蹙を買う оскандалиться」を意味するのは、この事実に由来している。

〈シュシューン шушун〉は農村の胴着の一種で、丈の短い「半コート кофта」、あるいは「シューバ шубок」のことだが、この語が読者に忘れ難いのは、エセーニンの『母への手紙 Письмо матери』に出てくるからである³²。とはいえこの語が文学の世界で見られるのはそのずっと前のことであり、すでにプーシキンの『ピョートル大帝の黒奴 Арап Петра Великого』に登場している [4 章]³³。

6 節

衣裳と髪型におけるデテールあれこれ

Некоторые детали туалета и причёски

日常生活の場からはとうの昔に姿を消したものの、ロシア古典文学の世界において生き長らえ、読者の頭を悩まし続けている衣裳や髪型もある。相対的に出会う頻度の高いいくつかの衣裳と髪型について、ここで説明しておくことにしよう。

〈ブークリャ букря〉[仏語のboucleに由来]、あるいは〈ブークリャ пукля〉は、額、あるいはこめかみに垂らす巻き毛のことで、18世紀後半に大流行し

³² 「とうに廃れた古いシュシューンを着て В старомодное ветхом шушуне」という表現が、第2連と最終9連の最終行に母親の服装として二度反復されている。

³³ ちなみに「シュシューン」と一緒に「キーチカ」も出てくる——「昔ながらのシュシューンとキーチカを纏った大貴族夫人 барская барыня в старинном шушуне и кичке」。

た髪型である。一時は兵隊にさえ義務づけられたほどだった。

〈クウアフューラ куафюра〉[仏語の coiffure に由来]は、ふつくらとした女性用髪形のことであるが、ごく稀に髪飾りのことも意味した。

〈マニーシカ манишка〉は、「ワイシャツ сорочка」の前部を模した、男性用の胸当てのことである。現代でも「燕尾服」の下に着用されている。

〈オンブレーリカ ombrel'ka〉(仏語「ombre=影」に由来)は、日傘のことである。『罪と罰』のソーネチカ・マルメラードワは「オンブレーリカ」について、「夜には不要な傘 зонтик, ненужный ночью」だと考えている[2編7章]。

〈パチューリ пачули〉[英語の patchouli に由来]は、19世紀に流行した強烈な匂いに安香水のことである。トゥルゲーネフの『貴族の巢』のラヴレツキーにとってこの香水の匂いは、「不快極まりないもの весьма ему противный」であり[36章]、またチェーホフの『桜の園』のガーエフは、この香水の匂いをぶんぶんさせて、召使ヤーシャの神経を逆撫でしている[該当箇所不詳]。

〈トーク ток〉[仏語の toque に由来]は、背高でつばなしの女性用「シリャーパ」のことである。

〈トゥペーイ тупей〉[仏語の toupet に由来]は、昔ながらの男性用髪型のことで、前髪を膨らませるのが特徴である。肖像画から察するに、スウヴォーロフもこの髪形であった。『智恵の悲しみ』では、ファームッソフがエカテリーナにII世時代の重臣についてこう語っている——「何度会積されようが、トゥペーイを揺るがすことなどなかった Раскланяйся — тупеем не кивнут」[2幕2場]。レスコーフは、農奴の髪結いを主人公とした短篇『理髪師 Тупейный художник』を書いている³⁴。

〈トゥルニュール турнюр〉[仏語の tournure に由来]は、容姿に豊満さを与えるため、腰下部分にあてがってドレスを膨らませるようにした円形クッション

³⁴ 題名を直訳すると『トゥペーイの芸術家』となるが、人口に膾炙した邦題は『かもじの美術家』。

ン、あるいは同様のスタイルの「スカート」のことである。

しかし、これには留保をつけておかなければならない。トゥルゲーネフの長篇『処女地 НОВЬ』において読者は、登場人物の一人に関する次のような記述に遭遇する——「パリ娘の経験豊かな目は即座に、彼の服装、彼のトゥルニュール、彼の歩き方そのものに…〈略〉… 正真正銘の生粋の優雅さが欠けているのを見抜いた Опытный глаз парижанки тотчас подметил в его туалете, в его турнюре, в самой его походке... отсутствие настоящего чистокровного шику」[引用箇所不詳]。これはどういうことか、まさか男性も「トゥルニュール」を身につけていたとでも言うのだろうか？ いや、そうではない。ここでの「トゥルニュール」は、「立居振舞 манера держаться」を意味するフランス語「トゥールニュール tournure」の引き写しなのである。この意味はロシア語に根づかなかったため、いかなるロシア語の辞書にもこの意味での「トゥルニュール」は載っていないのである。

〈チュルリユルリユー тюрлюрю〉は、丈の短い薄手の「マンチーリカ／マンチーリヤ」のことである。このもったいぶった言葉を発しているのは、『智慧の悲しみ』のナターリヤ・ドミートリエヴナである——「いえ、それより私の縞子のチュルリユルリユーをお目につけたいものですわ Нет, если б видели мой тюрлюрю」[3幕7場]³⁵。

〈シェミゼートカ шемизетка〉[仏語の chemisette に由来]は、薄手の「ブラウスコфта」のことでもあるが、大抵は女性用ブラウスの胸部につける飾り布のことである。

³⁵ 「チュルリユルリユー тюрлюрю」はフランスの上流社会では使われない言葉で、フランスの職人たち、とりわけクズネツキー・モストにある流行衣料品店（縞子の上っ張りも販売していた）の名人たちの間だけで通じる隠語だったらしい。語源となったらしい仏語「turlurette」は、ギター、それに上っ張りの下にそのギターを忍ばせていた歌手のことを意味したらしい（А. Грибоедов. Горе от ума. А. Сухово-Кобылин. Пьесы. А. Островский. Пьесы. Изд. «Художественная литература», М., 1974, стр. 812-813.)

7 節

顎鬚と口髭

Бороды и усы

髭の蓄え方は厳密に規定されていた。ピョートル I 世は、農民、商人、小市民、聖職者についてだけは例外とし、「顎鬚 борода」の剃り落としを命じた。この政令の効力は、かなりの長期間にわたった。1832 年まで「口髭 усы」を蓄えることができたのは、「驃騎兵 гусар」と「槍騎兵 улан」のみであったが、その後すべての将校にその権利が認められた。皇帝ニコライ I 世は 1837 年、官吏が「顎鬚」、および「口髭」を蓄えることを全面的に禁止している。もっともそれまでにも、官職についている人々が「顎鬚」を蓄えるなど、滅多にないことであった。同皇帝は 1848 年にさらその路線を推し進め、貴族は例外なく、国務に服していないものまで全員、「顎鬚」を剃り落とすように命じた。西欧における革命運動との関連で、「顎鬚」に自由思想の兆候を嗅ぎ取っての措置であった。

アレクサンドル II 世の即位後、規制が緩和されたとはいえ、それでも官吏に許可されたのは、皇帝自身もお洒落で蓄えていた「頬髭 бакенбарда」だけであった。それにもかかわらず、1860 年代以降になると、「顎鬚」と「口髭」の双方を官職外にある男性ほとんどが蓄えるようになり、それが一種のモードとなった。ドストエフスキーの『白痴』では、プチャーツィンについてこう述べられている——「暗い亜麻色の顎鬚は、彼が官職についていない人間であることを物語っていた Темно-русская бородка обозначала в нем человека с неслужебным занятием」[1 編 8 章]。ちなみにトルストイの描く高官中の高官カレーニンは、「頬髭」を蓄えている [『アンナ・カレーニナ』該当箇所不詳]。

1880 年代以降、「顎鬚」はすべての官吏、将校、兵士が蓄えることを許可されたが、個々の連隊はこの件についてそれぞれ独自の規程を持っていた。従僕とは言えば、「顎鬚」も「口髭」も蓄えることを禁じられていた。例外は御者と屋敷番だけであった。

8 節

生地

Ткани

生地の種類は膨大な数にのぼるとともに、流行と産業が新しい生地を次々と導入し、古い生地を廃れさせていった。ここでは、ロシア古典文学の世界に頻出しながら、読者の理解を阻んでいる生地だけに絞って、アルファベット順に説明を加えてゆくことにしよう。

01. 〈アレクサンドレーイカ *александрейка*〉、あるいは 〈クサンドレーイカ *ксандрейка*〉 は、赤色、あるいはバラ色の綿織物のことで、白色かバラ色、あるいは青色の縞模様が入っていた。非常にお洒落な生地とみなされ、農民の「ワイシャツ *рубаша*」の素材として重宝された。

02. 〈バレーシ *бареш*〉 [仏語の *barège* に由来] は、模様の入った薄手の毛織物、あるいは絹織物のことである。19 世紀にこの生地から一番多く作られたのは、「ドレス *платье*」と「ブラウス *блузка*」である。

03. 〈バラカーン *баракан*〉、あるいは 〈バルカーン *баркан*〉 は、目のつんだ毛織物のことである。家具の被覆地として用いられた。

04. 〈ブウマージヌイー *бумажный*〉 という語にはよくよく注意しなければならない。古典作家の作品で登場人物の誰かがこの形容詞を冠した「円錐帽 *колпак*」を被っていたとか、トゥルゲーネフの『ムウムー』でグラシムがターニャにこの形容詞を冠した「スカーフ *платок*」をプレゼントしたといったくたりを読むとき、この形容詞を現代的な「紙の」という意味に解すべきではないからである。かつてこの形容詞には、「木綿の *хлопчатобумажный*」という意味があったのである。

05. 〈ガルニトゥール *гарнитур*〉 は、「グロデトゥール *гродетур*」 [仏語「*gros de Tours*」に由来] の訛った形で、目のつんだ絹織物のことである。

06. 〈ガールウス *гарус*〉 [独語の *Haar* に由来] は、目の粗い毛織物、あるい

はそれに似た綿織物のことである。

07. <デミコトーン демикотон> [仏語の demicoton に由来] は、厚手の綿織物のことである。

08. <ドラデダーム драдедам> [仏語の drap des dames に由来] は、薄手の羅紗のことで、文字通り「女性用 дамское」である。

09. <ザマーシカ замашка> は、「ポスコニナ поскони́на」(後述)に同じく、手織りの麻布のことである。トゥルゲーネフの短篇『ブリュック Би-рюк』では、主人公が「ザマーシカのシャツ замашная рубашка」を着ている。

10. <ザトラペーザ затрапеза> は、色の多様な糸で織った安手の綿織物のことである。ヤロスラーヴリの商人、ザトラペーズノフの工場で生産されたので、この名がついた。この生地は姿を消したが、「ザトラペーザの затрапезный」という形容詞は、「普通の」、「二流の」を意味する語として辞書に残っている。

11. <カジネート казинет> [独語の kasinett に由来] は、表面が滑らかな、半分毛糸の混紡生地のことである。

12. <カムロート камлот> [仏語の camelot に由来] は、目のつんだ毛織物、あるいは毛糸半分の混紡生地のもので、粗雑な縞模様が入っている。

13. <カナウース канаус> は、安手の絹織物のことである。

14. <カニファース канифас> は、縞模様入りの綿織物のことである。

15. <カストール кастор> [仏語の castor に由来] は、目のつんだ薄手の羅紗生地の一種のことで、「シリャーパ(つばのある帽子) шляпа」や「手袋 перчатки」に使用された。

16. <カシェミール (カシミヤ) кашемир> [仏語の cachemire に由来] は、高級な、柔らかくて薄手の毛織物、あるいは毛糸半分の混紡のことである。

17. <キターイカитайка> は、つるつるした綿織物のことで、通常は青かった。

18. <コレンコール (キャラコ) коленкор> [仏語の calencar に由来] は、安手

の綿織物で、一色に染色されるか、あるいは白いままだった。

19.〈コロミャーンカ коломьянка〉は、手織りの斑模様の毛織物、あるいは亜麻織物のことである。

20.〈クレトーン кретон〉〔仏語の cretonne に由来〕は、目のつんだ彩色織物のことで、家具の被覆地やダマスク張りの素材として用いられた。

21.〈リュストリーン люстрин〉〔仏語の lustrine に由来〕は、光沢のある毛織物のことである。

22.〈ムウホヤール мухояр〉は、斑模様の綿織物で、絹か毛が混紡されていた。

23.〈ナンカ нанка〉は、農民の間で人気のあった、目のつんだ綿織物のことで、名称は中国の都市「南京 Нанкин」に由来する。

24.〈ベーストリャチ пестрядь〉は、様々な色の糸で織られた、目の荒い亜麻織物、あるいは綿織物のことである。

25.〈ブリース плис〉〔羅語の pilus に由来〕は、目のつんだ綿織物のことで、毛羽立っていてピロードを髣髴とさせる。「プリューシ（フラシ天） плюш」 と語源が同じである。安手の上着や履物の素材となった。

26.〈ボスコニナ поскони́на〉は、大麻の繊維を手織りした麻織物のことで、よく農民の衣服の素材として用いられた。

27.〈ブリュネーリ прыонель〉〔仏語の prunelle に由来〕は、目のつんだ毛織物、あるいは絹織物のことで、女性用の履物の素材となった。

28.〈サルピーンカ сарпинка〉は、薄手の綿織物のことで、格子か縞の模様が入っていた。

29.〈セルピャーンка серпанка〉は、織り方の珍しい、目の荒い綿織物のことである。

30.〈タルラターン тарлатан〉〔仏語の tarlatane に由来〕は、透き通った薄手の織物のことで、「キセヤー（モスリン） кисея」に似ている。

31.〈タルマラマー тармалама〉〔仏語の termolama に由来〕は、目のつんだ絹織物、あるいは絹半分の混紡織物のことで、「ハラート халат」の素材となっ

た。

32. <トリープ трип> [仏語のトリープ tripe に由来] は、ピロードに似た、毛羽立った毛織物のことである。

33. <フウリャール фуляр> [仏語の foulard (=英語の scarf) に由来] は、薄手の絹織物のことで、他の何よりも頭や首に巻く「スカーフ платок」、「ハンカチ носовой платок」の素材となった。そのため「ハンカチ」はときに「フウリャール」と呼ばれることもあった³⁶。

34. <ホルスチーンка холстинка> は、薄手の亜麻織物、あるいは綿織物のことである。

35. <シャロン шалон> [仏の都市「Châlons」に由来] は、目のつんだ毛織物のことで、上着の素材となった。

最後にいくつかの <色彩 расцветка> について言及して、この章を閉じることにしよう。

01. <アデライーダ аделаида> は、暗青色のことである³⁷。

02. <ブランジェヴィー бланжевый> は、肌色のことである。

03. <ドヴウリーチネヴィー двуличный> は、正面から見ると二色のどちらともとれるように移ろう色彩のことである。

04. <デーキー дикий>、あるいは <デーケニキー дикенький> は、明るい灰色のことである³⁸。

05. <マサカー масака> は、暗赤色のことである。

06. <ブウケートヴィー пукетовый> (「ブウケート (花束) букет」 [仏語の bouquet

³⁶ アカデミーの4巻、あるいは17巻の辞書には、この生地で作られたものは「ハンカチ」のみならず、頭や首に巻くスカーフもすべて「フウリャール」と呼ばれた、とある。

³⁷ ダーリの辞書によれば「アデライーダ аделаида」はまた「オデルロイーダ оделлонда」とも言い、「明るい青、青がかった藤色 светлосиний, синелиловый」とある。フェドシュークの勘違いだろうか。

³⁸ アカデミーの4巻、あるいは17巻の辞典によれば、「デーキー дикий」は「暗い灰色の」となっている。フェドシュークの勘違いであろうか。

に由来] の訛り) は、様々な色がちりばめられていることである。

07. <ピューソヴィー пюсовый> (仏語「ピュース puce (蚤)」に由来) は、暗褐色のことである。